京都大学若手人材海外派遣事業　ジョン万プログラム（職員派遣）
平成２８年度事務職員短期派遣プログラム報告書

研　修　者	職　　名	総務部人事課　掛員
	氏　　名	中村　千晶
研修先等	渡航先国名	ドイツ連邦共和国
	研修先機関名	京都大学欧州拠点ハイデルベルクオフィス
	研修期間	平成 28 年 4 月 5 日～平成 28 年 9 月 28 日
具体的な研修内容	１．拠点業務 本学の海外拠点における業務は多岐にわたる。私は派遣期間を通じて、出張手続きや、物品購入、宿舎契約にかかる業務といった、幅広い事務を経験することができた。また、海外拠点等連絡会の報告担当者として、拠点における活動を本学へフィードバックすることにより、情報の伝え方を学ぶことができた。拠点の情報発信ツールであるホームページや Facebook を活用し、活動内容を伝えることもミッションの一つだった。毎月 1 度の学内へのニュースレター発信では、欧州拠点として、ロンドンオフィスの情報も取りまとめるため、数ある情報をいかにわかりやすく、読みやすくするか、ということに苦心した。 留学説明会においては、英語による本学紹介を行うとともに、日本へ留学を希望する学生に対する個別相談も行った。手続き等の詳細については、本学の担当部署に確認のために連絡をとるなど、学内の多数の部署とのやり取りを通じて、学内に対する見識も広げることができた。 本学とハイデルベルク大学の連携強化の一環として、週 1 回のミーティングをハイデルベルク大学国際部担当者と行い、活発な情報共有ができた。ミーティングに留まらず、いつでも連絡を取り合える関係の構築ができており、ハイデルベルクオフィス主催で、本学への留学を予定している学生を対象とした渡日前説明会および本学留学生との交流会を開催した際には、ハイデルベルク大学にて広告の掲示や学生へのメール配信などの協力を得たことで、スムーズな周知を行うことができた。 2016 年 11 月には、シュトゥットゥガルト大学主催で国際事務職員研修が開催される。当該研修への参加はドイツ側参加大学による推薦が必要だが、本学はハイデルベルク大学の推薦により参加が決定した。早い段階でオファーを得られたことについて、日ごろからのコミュニケーションが実を結んだと感じた。 更に、ハイデルベルクオフィスは日独６大学学長コンソーシアム	

	（HeKKSaGOn）の日本側代表窓口の機能を果たすことが期待されており、2016 年はカールスルーエ工科大学で日独６大学学長会議が開催された。残念ながら本会議の開催は私の帰国後となったが、日本側窓口としてドイツ側３大学（ハイデルベルク大学、ゲッティンゲン大学、カールスルーエ工科大学）を訪問し、事前準備や調整を行った。 ２．出張関連 　出張の機会も多くあった。世界遺産のマテッラというイタリアの都市で開催されたデータサイエンスの会議に参加した際には、学生が他大学の先生にここぞとばかりに議論を持ちかけていた姿がとても印象的で、どんなチャンスも逃さない姿勢に大いに刺激を受けた。加えて、在ドイツ日本国大使館などの公的機関や、ドイツ国内のみならず、欧州の主要大学を巡り、個別に大学間協定締結に向けた協議や聞き取り調査を行った。私の最後の出張は、イギリス・リバプールで開催された高等教育フェアへの参加だったが、拠点からは自分一人のみの参加だったので、最終試験のような気持ちで挑んだ。京都大学に求められていること、海外の大学や各種機関など幅広い視点からの意見を直接聞くことができたのは貴重な経験だった。 ３．拠点業務外の取り組み 　語学研修として、週２回、語学学校に通いドイツ語を学んだ。レストランや買い物など現地の店ではドイツ語を話すように心がけたこともあり、毎日少しずつながらも聞き取れることが増えた。単語ではなく、文章で話せたときは「継続は力なり」を改めて感じた。 　その他、見聞を広めるべく、ドイツ国内や近隣の国を訪ね、現地の文化や風習に触れるように努めた。日常生活においては、リサイクルや自然食品に対する意識の高さが、それらを特別なものとして捉えるのではなく、自然と生活に溶け込んでいる様を実感した。

本学の国際化に対する研修成果の活用方法・フィードバック	今回の研修を通じて、「経験に勝るものなし」と身に染みて思った。 経験豊かなURA職員の方々や現地職員の方、そしてハイデルベルク大学国際部の方々にお世話になりながら、一つひとつ経験していく中で多くのことがわかるようになっていった。わからないことでも、どこをどう紐解けばいいのかが見つけられることも多くなった。不安というのは、「わからない、見当もつかない」から起こるものであり、「経験してみる」ことでしか不安は解消できないのだと思った。そうしたことに気づくことができただけでなく、俯瞰的な物事の捉え方やこれまで持ち合わせていなかった度胸など、この機会によって得られたものの大きさは計り知れない。 ハイデルベルク大学の職員の方々と意見交換を重ねていく中で、関係強化を図ることでグローバル人材を育成し、両校の発展に努めよう、という共通認識を持った。具体的には、学生のニーズにマッチした現地インターンシップを盛り込んだプログラムの設計、研究者交流から共同研究への展開を通して、相互発展の道を追求することが重要だと感じた。 帰国後は、東南アジア研究所にて引き続き国際関係業務に携わることになった。今後は、この経験で得たことを最大限に活かし、京都大学の国際化の一助となれるよう精進していきたいと考えている。